

闇に消えゆく者たち

——『六十家小説』所収「死体を取り違える話」再論——

井 上 泰 山

一

社会の秩序と安定を維持するためには、人々の表現内容や行動様式に一定の規範を設け、規範に悖る行為を行う者を適度に牽制し、場合によっては社会から排除する必要がある。太古以来現代に至るまで、人間社会は多かれ少なかれ、そのような観念を基本理念として集団内に生きる人々の行動を規制し、必要に応じてそれを法体系に取り込むことにより、体制内の秩序を維持してきた。つまり、ある意味では、古来人間社会は「排除の構造」を容認してきたのであり、社会は常に「排除する者」と「排除される者」との二重構造のもとに維持されているといっても過言ではない。従って、結果として社会には規範の内側に留まって生きる者と、規範からはみ出して生きる者との二種類の集団が形成されることになる。しかし、実際問題として、規範の内と外とを厳密に区別する明確な一線を引くことは容易な業ではない。境界は常に曖昧なまま残されている。また、一人の人間が規範の内と外とを行ったり来たりすることも当然起こりうる。規範の内側に留まる者と、規範の外側にはみ出してしまった者とのせめぎ合いは、古来、中国文学の恰好の題材として取り上げられ、様々な作品に素材を提供してきた。

闇に消えゆく者たち（井上）

一

一例を明代の戯曲作品「黒旋風双猷功」に採ってみよう。周知の如く、「黒旋風」とは、明代に文字化された長篇小説『水滸伝』に登場して反体制集団の首領宋江を補佐する豪傑李逵の渾名であり、文字どおり「黒い竜巻」のように暴れ回って、あらゆる物を容赦なく破壊する。「黒旋風双猷功」劇においても、暴れ者としての面目は遺憾なく発揮され、宋江の命令を受けて梁山泊を降りた彼は、宋江の義兄弟である孫孔目の妻の姦通をいち早く察知し、妻とその不倫相手である下級役人の二人を血祭りにあげる。「双猷功」とは、不倫を犯した二人の首を梁山泊に持ち帰って宋江に報告することをさしている。

右のように、「黒旋風」劇の構造自体は、他の一連の「水滸劇」同様、一定の型に収まる単純なものであり、梁山泊の英雄豪傑が山を下りて暴れ回り、最終的に新たな仲間を連れて梁山泊にもどってくる、という筋書きを基本構造として成立している。その意味から言えば、構造自体に新味があるとはいえないが、ここで注目されるのは、姦通の張本人である孫孔目の妻・郭念児が、初めから「搽旦」すなわち、悪女としての性格を賦与されて登場することである。郭念児は孫孔目の幼い頃からの許嫁ではない。幼い頃からの許嫁でない女は結婚後も良妻とはなりえない、という観念が本劇の背後に横たわっている。初めて郭念児と対面した李逵は、彼女の立ち居振る舞いから、たちどころにその事実を察知し、いずれ孫孔目の身にふりかかるであろう災難を予見する。つまり、郭念児に対しては、「排除」の対象となることが初めから約束されており、あらかじめ規範の外側に身を置くべき者としての位置づけが明確な形で設定されている。従って、物語は、規範に悖る行為を敢えて犯す郭念児をいかにして「排除」するか、またその役割を誰がどのような形で担うか、といった事柄に興味が集まる形で進行していくことになる。悪役は初めから悪の属性を担った象徴的存在として登場し、規範に触れる行為を公然と行うことによって観客の期待通り規範の外側に追いやられる。郭念児の「排除」は、いわば作者と観客の両方によって事前に了解され約束されているのである。

明代以降の白話文学作品の中には、右に挙げた「黒旋風」劇同様、「排除の論理」を背景として成り立っていると思われる作品が数多く存在する。作者の側は「排除」を自明の事として物語りを進行させ、一方、観客や読者の方も「排除」される事実は何らの違和感もたない。それは、一つには現実の社会がそのような仕組みを作り上げているからでもあるが、さらに重要な事は、人々が無意識のうちに「排除」の構造を容認しているからでもあると思われる。本稿の目的は、近世の白話文学、特に、明代に刊行された短篇小説集『六十家小説』に収められた二篇の作品における登場人物の思考のあり方と行動様式分析を通して、作品の背後に横たわる規範意識と「排除」の構造を分析し、作品世界をより深く読み解くための視点を模索することにある。

二

具体的な作品の分析に入る前に、まずは中国社会における「排除」の構造について考えておきたい。中国近世社会における「排除」の構造を具体的な文学作品によって指摘した人物としては、井波律子氏の名前を挙げることができ。氏は『中国のグロテスク・リアリズム』（平凡社、一九九二年）の中で、明末に馮夢龍によって刊行された短篇小説集「三言」の中の幾つかの作品に内在する意識構造を説明するためのキーワードとして、「排除と抑圧」という表現を用い、結論として次のように述べている。

女性を「男性社会のなかのロマンチックな理想化をほどこされた構成員」としてではなく、アクチュアルな現実存在として描き出す「三言」の世界は、まさにこの視点から、伝統的体制の宿痾のごとき排除と抑圧の構造を、一瞬、白日のもとにさらして見せるのである。（二三四頁）

イーグルトンの『文学とは何か』の一節を引用しつつ、氏は『警世通言』第二十四卷に登場する妓女・玉堂春の捨て身の行動や、『醒世恒言』第三卷の主人公である瑤琴の勇氣ある行為に言及し、「遊郭の論理」を逆手に取った彼女たちの智慧に満ちた行為を公然と描く馮夢龍とそれを称讃する読者たちは、暗黙のうちに、イーグルトンの指摘するとおり、「女性の差別は、性差のイデオロギーの問題、男女が自分自身と相手を男性優位社会でどういうイメージとしてとらえているかの問題、粗暴なかたちをとってあらわれるものから無意識の奥底にひそんでいるものにいたるまで、ありとあらゆる領域の認識と行動の問題でもある」ことに気づいていたのかも知れない、と述べている。ここに言う「暗黙のうちに」という言葉は、「無意識のうちに」と言い換えることも可能であろう。確かに、氏のいうように、小説『三言』の中には、「排除」と「抑圧」をはねのけて、見事宿願を達成する妓女の物語が少なからず存在しており、そのことは、とりもなおさず、近世中国社会において「排除」と「抑圧」の構造が根強く存在し、しかも、人々が半ば無意識のうちにそれをある程度容認していたことへの具体的な証左ともなっている。

ところで、小説『三言』の中で「排除」され「抑圧」される対象となるのは、ひとり妓女ばかりではない。幽霊や妖怪など、およそ現実世界の規範の内側に入ることを許されない「鬼」もまた、社会の外縁に追いやられる存在である。井波氏の前掲書では、『警世通言』第八卷に収められた「崔待詔、生死の冤家」や、同じく第二八卷の「白娘子、永えに雷峯塔に鎮めらるること」などに登場する、「異界」に押し込められる「亡霊」や「妖怪」の姿を典型的な例として採り上げ、男性優位を前提として作り上げられた社会規範に入り込むことを最後まで拒絶された女性の姿を重ねあわせている。

前章においてやや詳しく紹介したように、井波律子氏は明代の短篇小説集「三言」に収められた幾つかの作品を通して、そこに歴然と存在する「排除」と「抑圧」の構造を指摘しつつ、「排除」される側の抵抗とその逆転勝利をも結論として描き上げた馮夢龍の姿勢に、白話文学が開拓した新たな意識の芽生えを読みとることの必要性を説いているように思われるが、実は、そうした「排除」の構造を備えた白話文学作品は、「三言」を嚆矢とするわけではなく、それ以前にも既に存在していた。馮夢龍自身も「三言」編纂にあたって素材として取り込んだと思われる『六十家小説』所収の幾つかの作品が、すなわちそれである。以下、『六十家小説』に収められた二篇の作品、「曹伯明錯勘賊記」と「錯認屍」に描かれた女性の形象を通して、「排除」の構造がいかにか巧妙に物語りの中に仕込まれているか、また、それはどのような社会通念を背景として成立しているか、といった問題を探ってみることにする。

周知の如く、『六十家小説』は合計六十篇の短篇小説を収めた作品集であり、明代嘉靖年間に杭州の蔵書家洪楹が当時存在していた講談や説話を集めて刊行したものと考えられている。元来十篇ずつ個別に刊行されたものであるが、六十篇のうち、現存する作品は僅か二十七篇であり、全体の半数にも満たない。ただ、幸いにも、本稿で問題となる「排除」の構造を内に含む作品は二篇とも存在し、その全貌を窺うことができる。

まず、「曹伯明錯勘賊記」に登場する女性の形象を探っておこう。物語は元代至正年間の事として描かれ、妻に先立たれた曹伯明が一人息子をかかえて後添えを求めるところから始まる。その梗概はおよそ以下のとおりである。

曹州東平府の曹伯明は東関で宿屋を営んでいる。年は三十で、驢兒という名の一人息子がいるが、妻に先立た

れてしまったため、花街で馴染みになった芸者の謝小桃を後添えに迎え入れるべく、伯母のもとにその旨相談に行く。伯母は相手が色街の女であることを知って再婚に反対するが、のほせ上がった曹伯明は聞く耳を持たず、必要な資金を用意して彼女を身請けし、正式に妻として迎え入れる。ところが、謝小桃には以前から尙都軍という馴染みの客があり、二人は密会の場で密かに曹伯明の殺害計画を練る。一方、曹伯明の方は五更頭という場所まで泊まり客を出迎えに行くのを日々の日課としていたが、早朝客待ちをしていると、追い剥ぎをはたらく宋林という男に出くわし、いずれ災難がふりかかるといふ趣旨の謎めいた罵声を浴びせられる。

数日経ったある雪の降りしきる冬の日の早朝、曹伯明はいつものように五更頭まで客を迎えに行くが、生憎その日は一人も泊まり客がやって来ない。やむなく雪の中を帰途につくと、道に風呂敷包みが落ちていた。周囲に人気もないため、落とし主に返すこともならず、曹伯明はそのまま風呂敷包みを家に持ち帰り、妻の謝小桃に事のいきさつを告げて保管させる。

ところがある日のこと、曹伯明をただちに喚問せよとの命令が東平府の役所から曹州に下り、伯明はただちに捕らえられて裁きの庭に引き出される。強盗罪に問われている事実を知って驚いた伯明が無実を訴え続けていると、妻の謝小桃がくだんの風呂敷包みを持って役所に訴え出る。妻の裏切りを知った伯明は風呂敷包みを拾った当時の状況を事細かに説明し、釈明にこれつとめるものの、知事は伯明を犯人と決めつけて一切とりあわず、文書とともに東平府に護送する。

東平府に着くと、左丞相の再審が始まり、盗品が証拠の品として見つかった以上弁明するも無駄であるとして責め寄る丞相の前に、伯明は再び窮地に立たされるが、後妻の謝小桃の出身が廓の女であることをうち明けた途端、丞相の心に不審の念が起こり、妻を召喚した上改めて審理をやり直すことに決定。その後曹州から妻

の謝小桃が連行されて尋問を受け、拷問に耐えきれなくなった彼女が自分と間夫との悪巧みを自白したことによって、事件は無事落着。尙都軍は刺青されて牢城送りとなり、謝小桃は奴隷の身として役所の管轄下におかれることとなる。

右の梗概によって明らかのように、物語は、妓女であった謝小桃が身請けされて曹伯明の後妻となり、以前からの馴染み客・尙都軍と結託して夫を殺害しようと企むが、裁判官の慧眼によって二人の謀略が暴かれる、という筋書きである。妻が間夫と組んで夫の殺害計画に着手するというプロットによってただちに想起されるのは、本稿の冒頭で紹介した水滸劇「黒旋風双献功」である。嫁いだ相手を裏切って間夫を作り、夫の殺害計画を練る妻が、夫との関係において稀薄であることが強調されている点も、両者は共通している。「黒旋風双献功」の妻は「兒女夫妻」（筒井筒の夫婦）ではなく、この「曹伯明錯勘賊記」に登場する妻も後妻である。異なる点はただ一つ、「黒旋風双献功」劇では裁判官のかわりに梁山泊の豪傑・李逵が登場して暴力によって強引に事件を解決するのに対し、後者の場合にはそれが裁判官の所作として審理経過がやや詳細に描かれるにすぎない。こうした事実を見ても、水滸劇など、明代に制作された雑劇と呼ばれる一連の演劇作品が、それ以前に存在していた説話に基本的枠組みを借りつつ、それらに依拠して成立していることが理解され、雑劇と語り物という異なる二つのジャンルの交流とその成立過程を探る上での重要なヒントが隠されているのであるが、この問題は当面本稿の主旨からそれるので、ここではこれ以上立ち入って論じることはいない。

ところで、本稿で問題とする「排除」の構造と相俟って特に注目しなければならないのは、右の「曹伯明錯勘賊記」に登場する曹伯明の伯母の発言であろう。伯母も伯明同様、連れ合いを亡くして独りで旅籠を切り盛りする同業者で

あるが、再婚の相談に訪れた伯明に対して、彼女は以下のような言葉できつぱりと反対意見を述べる。

不可取（娶）他、他是花門柳戸之人、心不一的。別娶箇良家的婦女。

（その女を娶るのはよした方がいいよ。なにしろ花街の女だからね、何を考えているか、わかったもんじゃないよ。かたぎの女を別に捜すにかぎるよ。）

再婚相手が妓女であると知らされた伯母は、「花街の女」であることを最大の理由として、躊躇することなく結婚に反対するが、のぼせ上がった伯明は聞く耳を持たず、伯母の勧告を無視して再婚を強行し、みずから難を招く結果となるのである。ここには、当時一般の社会通念としての、妓女に対する蔑視の観念が明確な形で表現されている。「花街の女」は一心を抱いているから決して妻に迎えてはならない、災難のもとになる、という伯母の発言と相俟って注目されるのは、伯明の再婚を担当した東平府の長官・蒲丞相の取った態度である。曹州で一方的に犯人扱いられた曹伯明は、首枷をはめられ、証拠の品となる風呂敷包みや審理文書とともに東平府に送られた後、再び蒲丞相の審理を受けることになるが、丞相は宋林という盗賊の首領が既に捕らえられており、彼の供述によって、伯明が盗品を横取りしたことは明らかであると詰め寄る。窮地に立たされた伯明は、泣きながら次のように訴える。

小人爲討娼婦謝小桃爲妻、致有今日屈害、望相公做主。

（わたくしは娼婦の謝小桃を妻に娶りましたばかりに、今日の冤罪を着せられることになりました。お殿様、どうかお助けください。）

伯明が蒲丞相に訴えた内容として記録されている言葉は、これが全てである。ところが意外にも、訴えを聞いた蒲丞相はたちまち曹州の下した裁定に対して疑念を抱き、軽々に処断することに危険を感じて再び謝小桃を喚問し、彼女を厳しく尋問する措置を取る。かつて曹州の役所で訴えた内容と大きく異なるものではないにもかかわらず、蒲丞相がただちに再審の必要性を痛感したのは何故か。思うにそれは、伯明の言葉の中に、後妻の出自に関する言葉が含まれていたからに他ならない。出身が「娼婦」であったという事実を知った蒲丞相は即座に、事件の真相の所在、すなわち、妓女あがりの後妻が夫の伯明を罪に陥れるために別の男と結託し、盗賊の首領を買収して盗品である風呂敷包みを五更頭近くの道に放置させ、それを伯明に拾わせることによつて盗品横領の冤罪を着せたことを悟つたのである。こうした丞相の態度から窺えるのは、先の伯母の場合と同様、「排除」される対象としての妓女に対する牢固とした既成観念の存在である。「二心」を抱く存在としての妓女、社会の規範に馴染まないが故に「排除」されるべき存在、そのような社会的通念の位置づけがなければ、特別な説明を加えられることもなく進展する物語の内容を、素直に受け入れることは困難であろう。

以上に述べた二人の登場人物、すなわち、伯明の伯母と東平府の丞相の取つた態度を踏まえた上で、ここで改めてこの物語の輪郭を考えなおしてみると、物語の冒頭に置かれた次の韻文は、主題を明確に暗示していると言う意味で、極めて象徴的な意味をもっていることが理解されるであろう。原句は七言律詩の型式を借りて一応のリズムを整え、偶数句を押韻させて、次のように表現されている。

二八佳人巧様粧

洞房夜夜換新郎

兩條玉腕千人枕

一顆明珠萬客嘗

闇に消えゆく者たち（井上）

做出百般嬌體態 生成一片歹心腸

迎新送舊多機變 假作相思淚兩行

物語が本題に入る前に話の「まくら」（入話）が置かれ、次に本題の主旨をおおまかに言い表す韻文が挿入されるのが「話本」の一般的な形式であるが、ここでもそうした常套に依拠しつつ、趣旨を端的に観客に伝える役割を果たしていると考えられる。詩に込められた意を汲んで全体を読み下せば、およそ次のようになるであろう。

二八うらわかき佳人おんなは巧たくみ様に装つくろい 洞房ねやにて夜よな夜よな新たんな郎らを換かえる

両條にほんの玉腕かひなは千だれ人が枕まくらし 一ひと顆つぶの明珠あまたは万あまた客がが嘗あじわう

百般あれこれと嬌あだな體態こなしを做つくり出だし 一おおい片いなる歹よからぬ心腸たぐらみおも生成いく

新あたらしさを迎むかえ舊ふるきを送かりて機變かわりみあざむ多おほか 假にせものの相は思れた涙なみだを兩行ふたしな作なす

金銭によって売買される存在としての「妓女」、手練手管を駆使して男を手玉に取る「廓の女」の生態が見事に活写されている。物語の作者は、この詩を冒頭に置くことによって、世の男たちに対して警鐘を鳴らしたのであり、それはそのまま、物語の基本的な方向をも決定する役割を担っている。いわば、物語全体の伏線的役割を果たしているのである。

ここまで詳しく検証したように、「曹伯明錯勘賊記」の物語は、「妓女」の属性に対する社会の固定観念に依拠しつつ、それを規範化された社会構造から「排除」する過程を組み入れることによって始めて、物語の基本的枠組みを

成立させていることが理解される。そこには、当時の一般社会に存在した、「妓女」に対するあからさまなる差別意識の存在が見てとれるのであるが、考えてみれば、売買される「商品」としての位置づけしか与えられない「妓女」が、当時の社会において規範の内側に入ることを容認されなかったのは、至極当然のこととも言える。金銭によって売買される「物」としての存在に人格が賦与されるはずはない。伯明の後妻として妓籍を抜かれた謝小桃ではあったが、当時の社会通念としての、「二心」を持つ女の汚名を返上する事はできず、間夫とともに裁きの庭に引き出されて、結局は規範の外側に追いやられる運命を背負っているのである。

四

次に、『六十家小説』に描かれたもう一つの「排除」の構造について考えてみることにする。問題となる作品は「錯認屍」と題され、夫婦喧嘩をきっかけとして家を飛び出した夫がそのまま行方不明になり、浮かび上がった別人の水死体を妻が自分の夫と誤認するくだりが描かれているところから付けられた題名であるが、内容を細かく読み進めていくと、妻が夫の死体を誤認する話自体は、この物語全体の枠組みに対してさほど重要な意味をもつものではなく、物語の本題が実はそれ以外のところにあることが理解される。時代は宋の仁宗皇帝の頃に設定され、物語は四十歳になる喬俊という名の生糸を扱う杭州の行商人と、自宅で酒屋を営む妻の高氏、年頃の一人娘玉秀、及び、喬俊が旅先で見初めて連れ帰った妾の周氏、周氏の下男・小二の五人を主要人物として展開し、主人のいない留守宅をあずかる高氏が周氏と小二の不倫に気付かず、二人の暗躍を許したことから、やがて高氏による小二殺害へとつながり、最終的には事件が発覚して一家滅亡に至る経緯を克明に描く。冒頭の部分で喬俊一家の家族構成や、自宅で経営している酒屋稼業の商いの様子などが淡々と紹介された後、喬俊が行商の帰り道、南京の渡し場で周氏を見初める所からこの

物語は始まる。後に詳しく検証する主題の所在に関する議論をわかり易く進めるためにも、やはり、あらかじめ物語全体を俯瞰しておく必要があるう。

生糸の行商を生業とする喬俊は、南京で見初めた高官の妾周春香を譲り受け自宅に連れ帰るが、妻の高氏は妾との同居を拒み、別居と財産分与を要求する。喬俊はやむなくこれに同意して、以後、本宅と別宅とを行き来する二重生活が始まる。半年余り経った九月、喬俊は妾の周氏を別宅に残したまま行商に出、二箇月経つても帰つて来ない。

ある冬の日、周氏のもとに村長が尋ねて来て、義務としての賦役を果たすよう迫るが、喬俊の不在を知つて替わりの人夫を金で雇うよう要請。周氏がこれに同意すると、村長は翌日、董小二という二十歳になる若者を連れてきて喬俊の代りに護岸工事にあたらせ、賦役以外の日は周氏の家で下男として働かせる。独り寝の寂しさに耐えきれない周氏と、年若い下男の小二。二人はいつしか互いに惹かれるものの、主人と使用人という身分の壁は簡単には超えられない。ところが、年の瀬を迎えた十二月の三十日、周氏はついに自ら行動を起こして小二を誘惑し、二人は深い仲になる。

周氏と小二の関係が続いてしばらくすると、世間の口に戸は立てられず、いつしか二人の噂が高氏の耳に入る。高氏は世間体を考えて周氏を本宅に呼び戻すことにし、周氏もそれに同意するが、既に深い関係にあった小二とも別れがたく、人手の足りない酒屋の仕事を手伝わせることを口実にして高氏を説得し、本宅に住むことを許してもらう。本宅に移つてからも周氏と小二の関係は続くが、以前のように自由気儘に振る舞うわけにはいかなくなる。そうこうするうちに、小二が高氏の一人娘玉秀に言い寄り、拒む彼女を強引に自分のものに

してしまふ。

それから一月余り経つたある六月の半ば、入浴中の娘の体の変化に驚いた高氏が玉秀に直接事の次第を問いただしたことにより、事態が全て発覚。高潔をもって自認していた高氏は、自らの迂闊さを悔いるが、既に後の祭りであつた。高氏は事件の背後に周氏が関わつて糸を引いていることを察し、周氏を罵りつつ娘の将来を案じるものの、他に取るべき名案も浮かばず、思案に余つた末、小二の殺害を計画する。八月の中秋節、高氏はついに計画を実行に移す。裏庭で月見の宴を開き、小二に大盤酒を振る舞い、泥酔している隙を狙つて殺害。杜氏の洪三に指示して近くの河に死体を投げ込ませた後、露頭を恐れつつ商売を続ける。

高氏を取り巻く事件はここで一端停止し、この後、本章の冒頭で紹介した別の一組の夫婦（皮職人の陳文一とその妻程氏）喧嘩が挿入される。河に投げ込まれた小二の水死体を、程氏が、出奔した自分の夫のものと誤認する過程が描かれた後、二つの事件の連携役となる人物、王青が登場する。彼は所謂たいこ持ちで、町で評判のごろつきであつたが、川縁で泣き叫んでいる程氏の要望を受けて死体を岸に引き上げたところ、それが小二のものであることを知り、高氏の家を押し掛けて、口止め料と称して高氏に金銭をゆする。高氏が要求を拒み、怒つた王青が裁判所に訴え出たことから、高氏の家で起こつた殺人事件の全貌が明るみに出、関係者一同、獄につながれた挙げ句、全員獄死する。

一方、東京で妓楼に入り浸つて一文無しになつた喬俊は、遣り手婆婆に追い出されて、およそ二年ぶりに帰宅するが、近隣の者から事の顛末を聞き、悲嘆の余り西湖に身を投げて果てる。

以上によつて明らかになように、「錯認屍」は、四十になる男が妾を迎え入れたために起こる夫婦間の不和、主人の

いない留守宅で繰り広げられる不倫と殺人、結果的に引き起こされる家庭の崩壊と一家の滅亡を描いた作品である。煩を厭わず、やや詳細に事件の推移を記したのは、この物語が最終的に喬俊一家の滅亡を描く作品であるとはいえ、そこに至る過程で様々な人間模様が織り込まれ、しかも、それらが一つ一つ有機的に関連しつつ事態が進行していくことを再確認するためである。めまぐるしく生起する個々の事件が一定の合理性とともに展開して読者を飽きさせないこの作品は、「話本」の代表的作品として高い価値を有し、様々な要素を内包しているだけに、論ずべき点は多々あるが、まずは作品を成立せしめている基本的枠組みを確認しておくことにする。

既述の如く、作品中には様々な人間模様が盛り込まれ、悲惨な結末を迎えるまでには相当複雑な細々した出来事が描かれていくのであるが、しかし、「錯認屍」の物語に込められた作者の意図を探るのは、それほど困難な作業ではない。というのも、物語の展開に合わせて、随所に要点をおさえた警句や解説が挿入され、観客ないしは読者に対して、必要な注意を喚起しているからである。「入話」に続く冒頭の部分で、作者は早速、七言の絶句に託して白説を開陳する。

世事は紛々として竟く陳べるは難し 機を知れば端く終身を誤ることなし
 若し国を破り家を亡す者を論ずれば 盡て是花を貪り色を恋する人なり

後半の二句が、女性に対する欲望は国家を破壊し家庭を滅ぼす根源である、として男性の好色を戒めていることは明らかであるが、ここで注意しなければならないのは、人間が本来的にもっている異性への欲望そのものを全面的に否定しているわけではない、という点である。原文には「貪花恋色」という表現が使われている。この言葉は元来、

妓楼などで不特定多数の女性に対して過度の欲望を抱くことを指すものであり、夫婦間の愛情までも全面的に否定するものではない。既に紹介したように、正妻以外に妾を迎え入れた喬俊は、まさに、この戒めに悖る行為を敢えて犯したのであり、作者は、物語の冒頭にこの警句を置くことによって、いずれ喬俊を襲うであろう不幸な結末を予告したのである。

右の一事によっても明らかのように、物語の構造は、過度の「好色」がもたらした家庭の崩壊、という基本的な枠組みに支えられて成立しており、作者の意図もまさにその点を強調することにあるように見受けられる。「好色」の戒めは独り喬俊に対してのみ発せられているわけではない。平穩であったはずの家庭に波風が起ち、やがてそれが殺人事件にまで発展せざるをえなかったのは、確かに喬俊の「好色」に端を発したことであったが、同時に、本宅にまんまと入り込んだ妾の周氏の浮気心にも起因していた。喬俊の帰りを待ちきれなかった周氏が下男の小二を誘惑し、さらに小二が高氏の一人娘玉秀を強姦したことにより、事態は一層複雑さを増し、結果的に高氏は追いつめられて殺人の大罪を犯してしまふ。「好色」の二文字は、この物語をその根底において成立せしめているキーワードであるといえる。この点に思いを致すならば、明代の代表的短篇小説集として知られる「三言」などと同様、この「錯認屍」の中にも、過淫を戒め世の風俗を正すという教訓的意図が込められていることは明らかであろう。喬俊一家に悲惨な結末をたどらせることによって、作者は一家の大黒柱たる男性に対して、他人から後ろ指を指されるような後ろめたい行為はするな、と戒めているのである。

しかし、作品内部に託された意図は、果たしてそれだけであろうか。私見によれば、この物語から読みとるべき主題は、実はもう一つ、別のところに潜んでいる。そして、その隠れた主題を発掘することによって初めて、この作品のもつ真の構造を理解することができ、ひいては、近世白話小説全体の中で与えられるべき正当な位置を確定すること

とが可能となる。以下、この問題については、章を改めて論じることにはしたい。

五

「錯認屍」の物語を通読して最も強く印象に残るのは、喬俊の正妻高氏の存在である。高氏は好色漢の喬俊とは対照的に、浮いた気持ちなど微塵も持たない極めて高潔な人格の持ち主として描かれている。高氏がその本領を最初に發揮するのは、喬俊が旅先で購った妾とともに突然帰宅した際のことである。あまりに唐突な出来事だけに、高氏はさすがに心の動揺を隠せないが、妾を囲うという夫の背信行為に対して、冷静な態度でただちに応戦する。妾を同居させたいという夫の我が儘を撤回させるべく断固拒絶するわけではないが、さりとして、為す術もなく要求に屈するわけでもなく、実に毅然たる態度で喬俊に二つの難題を突きつける。同居を拒否したばかりか、娘とともに全財産を独り占めすることをも、妾を囲うことの代償として提示したのである。結果的に喬俊はこれらの条件を受け入れざるを得ず、高氏の要求どおりに事は落ち着くのであるが、しかし、一般の人情に照らして考えれば、たとえ表面的に平静を装ってはいいても、二つの条件を突きつけた時の高氏の心中は決して穏やかならぬものがあつたに違いない。この点に関して作者は多くを語ろうとはせず、「都依你（全ておまえの要求どおりにする）」との返答を引き出した時の高氏の反応を描写して、ただ、「高氏不語（高氏は何も言わなかった）」と述べているだけである。だが、この短い四文字が生み出す効果は決して小さくはない。別居と全財産の譲渡、喬俊にとつては大きな痛手となるはずの二つの条件を敢えて提示することによって、高氏は、喬俊が翻意して妾を手放してくれることを心のどこかで期待していたに違いない。しかし、事實は期待に添うものとはならなかった。あろうことか、喬俊は、あっさりと二つの難題を受け入れてしまったのである。「不語」の二文字から、夫への一縷の望みを絶たれた直後の高氏の言いしれぬ絶望と諦念とを

読みとることは、それほどのはずれな深読みではないように思われる。

さて、高氏に備わる高潔な性格と高い倫理観とは、その後に生起する様々な事件を通じて次第に明らかにされ、強調されていく。なかでも一際印象的な場面としては、別居していた周氏を本宅に呼び戻して一緒に住むことを決意した時の、高氏の心中を描いた次のような言葉が挙げられる。

在我家中、我自照管着他、有甚皂絲麻線。

(家の中にいて、このあたしがちゃんと見張っていれば、何もやっかいな事など起こるはずはない。)

長年にわたって稼業としての酒屋を切り盛りし、主人のいない留守宅を守ってきた高氏の、自信の程を窺わせる言葉である。周氏と小二の仲に関する世間の悪い噂を心のどこかで気にしつつも、敢えてそれをうち消して同居しようとする高氏の、裏表のない性格と潔癖な性分が滲み出ている。

また、同居を始めて約一年後に起こる日常の些細な出来事も、高氏の高潔さを印象付けるのに十分な役割を果たしている。周氏と下男小二の仲が怪しいとの世間の噂を気に病んだ高氏は、周氏を本宅に呼び戻し、一緒に連れてきた下男の小二との同居にも不承／＼応じることになるが、いざ働かせてみると小二はなかなか有能な男であり、一年余りの間に、稼業としての酒屋の仕事をすっかり身につけ、古くからの職人であった杜氏の洪三をも顎で使うほどに存在感を増していく。勤勉な態度で着実に日々の仕事をこなす小二に対して、高氏も次第に気を許し、いつしか好感を覚えるようになって、周氏とのやりとりの中にも、思わず小二への誉め言葉が漏れてしまう。そうした高氏の微妙な感情の変化を周氏が見逃すはずはなかった。小二の実直な性格と勤勉さを誉めた高氏に対して、周氏はすかさず、娘

の玉秀の婿として小二を迎えるよう進言したのである。しかし、事態は周氏の思い通りには運ばなかった。提案を峻拒して毒づく高氏の次の言葉は、彼女の高潔と自尊心の高さを示して余りあるものであろう。

你這賤人、好無志氣、我女兒招顧工人為婿？

(このろくでなしめが、なんてはしたないことを。あたしの娘に使用人風情を婿にとれだつて?)

突然悪態をつかれた周氏はにわか返す言葉も失い、その後数日間、何かにつけて高氏に詰られるはめになる。予期に反して手痛い反撃を喰らうことになった周氏にしてみれば、とんだ藪蛇になったわけであるが、一方、罵った側の高氏も、自尊心を傷つけられたことに対して怒りを爆発させるばかりで、縁談を勧めた周氏の真の魂胆にまで思い至るゆとりは無かった。周氏と小二とは別居していた当時から深い仲にあつたのであり、小二が娘の婿になれば喬家の財産を自由に操れることを狙つての提案であることまでは見抜けなかつたのである。考えてみれば、潔癖と自尊心のかたまりであつた高氏に、世間慣れした周氏や小二の魂胆が見透せなかつたのは無理からぬ事であるが、まさにこの一事によって、高氏はその後、逃れられない非情な運命の齒車に巻き込まれ、やがて娘ともども死地に赴くことになるのである。

右に述べたように、作者は高氏に対して高い倫理感を賦与し、賢妻の鑑ともいふべき人格を創造した。当時、富裕な商人階級の風習としてさほど違和感があつたとは思えない、妾を迎えて同居するという夫の要求に対して、これを一蹴し、別居という新たな生活形態を選択することを敢えて提示した彼女の毅然たる態度は、そもそも何故可能となつたのか。

このような疑問を出発点とし、「錯認屍」に社会学的ないしは経済学的視点を導入して斬新な作品論を展開したのは、石母田正氏であった。氏は一九四九年、岩波の『文学』十七巻十号に掲載された「商人の妻」と題する論考の中で、高氏の特異な形象のあり方に強い関心を寄せ、彼女のあくまでも高潔な性格と高い倫理観とが、単なる偶然によって生み出されたものでなく、中国中世都市の富裕な商家に備わりつつあった確固たる経済的基盤に裏打ちされて初めて可能となったものであることを、彼女の言動を通して細かく論証するとともに、当時既に成立していたであろう家格意識の存在にも触れ、「古い勤勉な女房のもつ過度の儉約心と家父長的自信が、彼女の良人にたいする正しい条件をみずから反古にし、その悲劇を招いたのである」と結論付けた。氏はまた、喬家の経済的基盤を『金瓶梅』の西門慶のそれと比較し、西門慶が「退廢的寄生的な階級としての商人」であり、「士大夫の儒教的倫理や富める階級の頹廢的倫理の重圧」に屈した形でのみ行動する作品であるのに対し、「錯認屍」の高氏に備わる高い倫理観が、「儒教的貞節とはなんのかかわりもなく生活自体の生み出した倫理であり、伝統的倫理に反抗するものである」として、中世の民衆の間に長く蓄積されていたであろう、支配階級の倫理に対する反抗の精神の存在を鋭く指摘した。氏は論考の冒頭で、「専門外の中国のことであり、まして不案内な文学にかんすることである」と謙遜の辞を添えてはいるものの、必ずしも著名とは言えない中世の一文学作品に取って踏み込んで独自の切り口を通して深い考察を加え、作品内部に散りばめられた断片的叙述を丹念に拾い上げて民衆の潜在的意識の存在を具体的に論証した氏の業績は、高く評価されるべきであると考えられる。同時に、経済的統計や歴史的資料のみによつては見えてこない、民衆のもつ反体制的エネルギーの存続をも鋭く抉りだした点、文学という表現手段に内在する無限の力とその可能性とを、明確な形で指摘したものといえよう。深い学識と鋭い洞察力に裏打ちされた石母田氏の論考は、専家の論に優るとも劣らぬ、まことに注目に値する力作であることは疑いない。

六

前章において詳しく紹介したように、石母田氏は、「錯認屍」に登場する人物のうち特に高氏に備わる高い倫理観を分析し、それが可能となつた背景を、当時の商人社会において既に成立していた家格意識と経済的基盤に求めたのであるが、ここで、本稿で問題とすべき規範意識の存在という観点からこの物語を改めてとらえなおしてみる時、そこにはもう一つの重要な側面が隠されていることに気付く。既に確認したように、「錯認屍」の物語は喬俊の「好色」に起因する一家の滅亡を描いた作品である。諸々の事件は、喬俊とその妻、及び一人娘の玉秀を正面に押し出した形で展開し、それ以外の人物は、一見、喬俊一家を不幸な結末へと導くための付随的存在にすぎないようにも思われる。しかし、翻つて考えてみれば、喬俊が旅先で妾として連れ帰つた周氏と、賦役の代行役として周氏に雇われた小二是、いずれもこの物語を進展させていく上では不可欠とも言いうる程の重要な役割を担つた存在である。喬俊の「好色」を戒めるためには、それを実際に具現するきっかけとなる人物が必要である。その役割を担うのがすなわち、喬俊の魂を奪う妾の周氏であり、また、やがて周氏と深い仲になって高氏の資産を狙う下男の小二である。周氏と小二、この二人の存在こそは、この物語をその根底において支えている重要な柱であるといえるであろう。以下、本章では、周氏と小二の二人に焦点をあて、規範の内側に入ることを最後まで許されず、いわば排除されることを前提として登場する彼らが、いかなる形で物語に組み込まれているか、そしてそのことは、この小説に内在する規範意識の存在とどのような関係があるか、という問題を考えてみたい。

ここで、議論の前提となる、作品中における二人の輪郭を再確認しておくことにする。周氏と小二はいずれも、物語に登場した当初、性格面に関してはあまり明確な輪郭を与えられてはいない。というよりもむしろ、極めて曖昧な

形で登場させられている、という方が真相に近い。周氏は建康府の巡検の侍妾であったが、巡検が他界したためその内儀に伴われて山東に帰る途中、南京の渡し場で強風により足止めをくった喬俊の隣の船に乗り合わせ、好色漢の喬俊の目に留まる。周氏は、「雪のように白い肌をした、黒髪の美しい女」であったが、性格が窺える程の発言の機会も与えられず、ただ問われるままに春香なる名前と二十五歳という年齢を明かすのみである。一方、下男の小二の場合はどうであろうか。喬俊に課せられた賦役の代行役として周氏の前に現れた彼は、名前を董小二といい、年は二十歳、幼い頃に両親を亡くして、他人に替わって労働力を提供することで生活している上海県の貧しい若者であった。そんな彼の登場の仕方は、周氏の場合と大差ないばかりか、むしろ周氏の場合以上に曖昧な形で登場させられる。つまり、村長に伴われて周氏の居宅に現れた彼は、自分からは一言も発言の機会を与えられず、全て村長の口を通じてその簡単な生い立ちが紹介されるに過ぎないのである。

二人のこうした登場の仕方を見ると、そこには一つの共通点があることに気付く。それは、二人とも、登場に際して、自らを表現する言葉を与えられていない、ということである。喬俊の前に立ち現れた周氏の様子は、専ら語り手の目を通して描写され、本人自身は名前と年齢以外には殆ど語る機会を与えられない。事情は董小二の場合も全く同様であって、全ては村長の口から間接的に紹介されるに過ぎない。やがて物語の根幹に関わる大事件を起こすべき役割を担って登場しておきながら、自らは発言の機会を極度に制限されているのである。こうした二人の印象を喩えて言うならば、二人はまるで、闇から立ち現れた黒衣のように、茫洋とした形で突如として舞台上に立ち現れるのである。では、一端舞台上に登場した後の二人の様子はどうか。既に述べたように、ここでは、登場当初とは打って変わって、次第に本性を顕わにし始め、ついに物語の前面にしゃしゃり出て、最終的には喬俊一家を破滅へと導く張本人になるのである。周氏は、別宅を与えられた直後から物語の中心に位置し始め、董小二を雇い入れるとたちまち

本性を現して彼を誘惑し、精神的にも肉体的にも彼を支配して、いわば小二の主人として君臨する。一方、小二の方はどうかというと、始めのうちこそ名実ともに主人たる周氏に自由に操られる存在としての自分に甘んじてはいるが、周氏とともに本宅に呼び戻されて然るべき仕事と責任ある立場を与えられてからは徐々に勢力を伸ばし、二年も経たないうちに古株の杜氏の洪三をも凌ぐほどに存在感を増していく。そんな彼がいつしか一人娘の玉秀に言い寄って、ついに強引に征服してしまうのも、世間にありうべき事として容易に納得されるものである。しかし、玉秀を手込めにするものについては、決して彼が単独で実行に移したものでなかった。全ては周氏との綿密な打ち合わせのもとに計画的に実行されたのである。そのことは、事態に気付かぬ高氏に向かって小二を婿に取るよう周氏が勧めた際の、語り手の解説によって明らかである。つまり、高氏の財産に目をつけた周氏が、小二に玉秀を襲わせ、既成事実を作る作戦に出たのである。

一方、小二にしてみれば、玉秀との縁組みに成功すれば高氏の財産を自由にできるばかりか、これまで専ら支配されるだけの立場に立たされてきた周氏との関係に一石を投じる絶好のチャンスでもある。二人の間には微妙な計算と駆け引きがあったと思われる。玉秀との間に既成事実を作ることによって縁組みを迫る、という強引な手口に頼つても取返して自らの勢力伸張をはかろうとする小二の行為を、卑劣で浅薄な行為であるとして非難することは容易であろう。しかし、身寄りも財産も無い彼が、生活の足場を築き、世間に認知されるためには、そうした非合法的手段に訴える以外に方法はなかった。思うに、小二は元来勤勉で有能な働き者であり、さればこそ、高氏にも認められて徐々に勢力を伸ばしたのであった。しかし、人間誰しも慢心と無縁ではありえない。小二の場合も、時間の経過とともに次第に初心を忘れて傲慢になり、結果的に、勤勉一筋で築いてきた立場を一瞬にして失うことになるのである。人間の心奥に潜む欲望から取返して目をそらすことなく、それを極めて自然な筆致で淡々と描いていくこの作品は、まさに

白話文学が到達したリアリズムの一つの頂点であるといっても過言ではないように思われる。

右に述べたように、周氏と小二の二人は、この物語の進行上欠くことのできない重要な人物として登場し、喬俊とその家族を滅亡の淵に追い込んだ後、みずからもまた、事件の渦に巻き込まれて姿を消していく。小二は周氏とともに本宅に呼び戻された後、しばらくは勢力を伸ばして安定した生活を送るが、周氏の企みに乗せられて玉秀を襲い、怒り狂った高氏によって絞殺され、短い生涯を閉じる。また、周氏は喬俊の妾として迎えられて暫くの間生活を共にしたものの、行商に出た喬俊とはその後再び会うことはなく、小二の殺害に手を貸して共犯の罪に問われ、やがて獄死する。

こうした二人の末路を改めて考えてみると、そこには作品に予め組み込まれた一つの明確な意図が浮かび上がってくる。周氏と小二は二人とも、いわば人間の「負」の属性を背負った、規範から排除されるべき存在として登場し、結末に至るまで、その属性が変化することはない。周氏はもともと巡検の妾であった。喬俊の目に留まってからは別宅を与えられてしばらくの間気楽な生活を送っていたが、妾であるという身分は変わらず、本宅に移っても終始不安定な身分に甘んじなければならなかった。小二の場合も、高氏に認められて一時的に安寧を得たかに思われるものの、内なる欲望には勝てず、結局は高氏の手にかかって果ててしまう。いわば、二人とも、登場した当時背負わされていた「負」の属性を断ち切れぬまま、いつしか闇に葬られてしまうのである。

七

前章までに細かく分析したとおり、『六十家小説』に収められた作品の中には、「排除の論理」を前提として成り立っていると思われる作品が複数存在している。本稿では、それらのうち「曹伯明錯勘賊記」と「錯認屍」の二作品に

ついで、その登場人物や物語全体の構造を詳細に分析することによって、意図的に組み込まれた「排除」の形を明らかにした。「曹伯明錯勘賊記」に登場する妓女の謝小桃は、いったん身請けされて商家の妻となるものの、「二心」をもった存在としての烙印を押されたまま、最後まで規範の内側に入ることは許されない。一方、「錯認屍」の周氏も、妾という日陰の身分を脱しきれぬまま、殺人事件に加担して失意のうちに生涯を終える。周氏の下男小二もまた、一時的に羽振りを良くしたものの、結局は泥酔したまま絞殺されてしまう。彼らは、物語の進行をその根底において支えてはいるが、大前提として組み込まれている、排除される者としての立場を変えることは許されず、最終的には人間の「負」の側面を強調する役割に徹して静かに表舞台から去っていく。作者は恐らく無意識のうちに、そうした排除されるべき人間を登場させ、読者の側もまた、それを当然のこととして受け入れたものと思われる。

二作品の構造分析と、その背後に横たわる意識については、以上によってほぼ問題を解き明かすことができたものと考えられるが、ここでもう一点、作品の構造を決するにあたって重要な役割を担っていると思われる当時の社会通念を指摘しておきたい。それは、中国社会において古くから存在していた、女性に対する蔑視の意識である。中国では、古代からすでに、女性をあらゆる災難の源であるとして「過淫」を戒める風潮があった。所謂「禍水論」と呼ばれるものがそれである。世の中にかかるあらゆる厄災の原因を女性の存在自体に求める考え方が、男性優位の社会を存続させるために生み出された不当なものであることは言うまでもないが、こうした考え方の存在を念頭に置いた上で、本稿で扱った二作品の構成を改めて見直してみると、登場する主要な女性の末路がいずれも悲惨な結果に終わっている理由が明確になってくる。「曹伯明錯勘賊記」の謝小桃は、身請けされた後も良妻にはなりえず、間夫とともに夫を亡き者にせんとして緻密な計画を練る。また、「錯認屍」の妾役である周春香も、喬俊の帰りを待ちきれずに下男と通じ、喬俊一家を滅亡の淵に追い込む発端を作る。いずれの場合も、女性を災厄の根源と見なし、やがて訪れる不

幸の因果関係に組み込んでいることは、両作品ともに共通している。この点は、中国の話本研究者・王昕女史も、その著作『話本小説の歴史與叙事』（中華書局、二〇〇二年）の中で既に指摘しており（二五二頁）、そのような思想的背景が根強く存在している以上、両作品の結末もまた、一定の方向に向かうことになるのは、至極当然のことでもあろう。

作品に内在するこうした意識構造の存在を理由として、「話本」の前近代性とその限界を指摘することも、あるいは可能であるかも知れない。そのためには、同時代に文字化された他の多くの作品に見える共通の現象を細かく検証することが必要になるであろう。いずれにしても、本稿で取り上げた二つの作品に垣間見える「排除の論理」と、それによって浮き彫りにされる「抑圧」の構造は、その後も長期間にわたって執拗に居座り続け、明代以降の数多くの文学作品に出没して、次々に犠牲者を闇に葬り去ることになる。本稿の論題を「闇に消えゆく者たち」とした所以である。

* 本稿は、平成十三年度文学部学部共同研究費（中国における作品評価の諸相）による研究成果の一部である。